

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

研究会基本情報

1. 日時：2015年12月19日（土）13:00-17:10
2. 場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 セミナー室(301)
3. 内容
 - (1) 孫在賢（AA 研共同研究員，徳成女子大学）「大邱方言の用言のアクセント」
 - (2) 黄賢暲（国立国語研究所）“Interaction between focus prosody and wh-scope marking”
 - (3) 姜英淑（AA 研共同研究員，松山大学）「韓国光陽地域方言におけるアクセントの多様性」
 - (4) 早田輝洋（九州大学元教授）「上代日本語の母音脱落——母音の広狭を条件としない見方——」

大邱方言の用言のアクセント

孫在賢（AA研共同研究員，徳成女子大学）

本発表では、韓国語の大邱方言の用言のアクセントを取り上げ、語音とアクセントの相関関係について考察した。大邱方言の二音節語用言は、語頭音節に長母音を含むか否かなどによって一定のパターンを示しており、語音と相補的な関係になっている。次に、語尾が用言に結び付いた際にアクセントに及ぼす性質を調べた結果、それぞれ一定の性質を持ち、規則によって説明できることがわかった。最後に、中期朝鮮語の傍点資料も考慮に入れて考察し、語音(分節音)との相関関係を提示した。

Interaction between focus prosody and wh-scope marking

Hyun Kyung Hwang

(National Institute for Japanese Language and Linguistics)

The coincidence between wh-scope and a specific prosodic domain has attracted intensive interest in Tokyo Japanese (Ishihara 2002, 2004; Kitagawa and Fodor 2003; Kitagawa 2005, Hwang 2011). It is argued that compression of F0 marks scope for a wh-phrase in this variety. Interestingly, a somewhat different prosodic pattern, involving high flat F0, can likewise mark wh-scope in Fukuoka Japanese (Hayata 1985; Kubo 1989; Hwang 2011), and South Kyöngsang Korean (Kubo 1993, Hwang 2011). In these varieties, Kubo and Hwang show that lexical accent deletion can accomplish scope marking in South Kyöngsang Korean. Since focus is prosodically marked by F0 compression in Fukuoka Japanese and South Kyöngsang Korean, it would be interesting to see how focus prosody and wh-scope marking interact in these languages.

In this paper, three different structures are examined. First, when a wh-phrase itself receives focus, the prosodic domains of focus and the wh-phrase overlap completely (WH=F). Second, a wh-phrase precedes a focused item (WH>F). Third, a focused item precedes a wh-phrase (F>WH). In order to provide appropriate context in which focus and a wh-phrase form the intended structure, each target sentence was uttered as answers/additional questions to a prompt question/statement. Two female and two male speakers of each language participated in the recording. All were born and grew up in the respective linguistic target areas.

In Fukuoka Japanese, the structure of complete overlap exhibits only the accent deletion pattern, not F0 compression. A similar accent deletion pattern is observed when a wh-phrase precedes a focused item. On the other hand, when a wh-phrase follows a focused material, the prosodic pattern includes both F0 compression and accent deletion. Turning to South Kyöngsang Korean, prosodic patterns of complete overlap and those of focus preceding a wh-phrase (F >WH) are parallel in Fukuoka Japanese. An interesting difference is observed in the structure of a wh-phrase preceding focus (WH>F). The domain of wh-scope marking terminates by the focused item, and post-focus F0 compression is realized. I show that the prosodic marking of wh-scope always takes priority over focus marking in Fukuoka Japanese, whereas focus is prosodically marked in some environment in South Kyöngsang Korean.

Selected references

- Hayata, T. 1985. *Hakata hougen no akusento·keitairon [The accent and morphology of the Hakata dialect]*, Fukuoka: Kyushu University Press.
- Hwang, H.K. 2011. *Scope, Prosody, and pitch accent: The prosodic marking of wh-scope in two varieties of Japanese and South Kyeongsang Korean*. Ph.D. dissertation, Cornell University.
- Ishihara, S. 2002. Invisible but audible wh-scope marking: Wh-constructions and deaccenting in Japanese. In L. Mikkelsen and C. Potts (eds.) *WCCFL* 21, 180–193.
- Kitagawa, Y. and J.D. Fodor. 2003. Default prosody explains neglected syntactic analyses of Japanese. *Japanese/Korean Linguistics* 12, 267-279.
- Kubo, T. 1993. Flat high pitch and the scope of wh-words. *Studies of Languages and cultures of Asia and Africa* 22, Tokyo university of Foreign studies.

韓国光陽地域方言におけるアクセントの多様性

姜英淑 (松山大学)

本発表は、韓国の全羅南道光陽市に位置する多鴨面 (Daap-myeon), 金湖島 (洞) (Geumho-do), 光陽邑 (Gyangyang-eup) 方言の名詞を取り上げ, そのアクセント特徴を明らかにすることを目的とする。



<図 1 全羅南道 光陽市>

多鴨面は、「HHL…」, 「HLL…」, 「LHH…L」の三つの型が対立を成している。「HHL…」と「HLL…」に属するものは, 文節の長さが4音節以上になると, 下降の遅れによる「HHML…」・「HMLL…」が多く現れるが, 丁寧に発音するとそれぞれのアクセント型の特徴がはっきり現れる。また, 4音節語以上では, 「HHL…」が「LHH…L」と併用されることもある。第1音節が長母音で現れるものは, 軽い上昇が現れるが, 基本的には高平に発音されるため, 「HHL…」に属するものと解釈できる。「HLL…」の1音節語に-k'aci (~まで) が付くと助詞の第1音節が高く発音

され「L-HL」で現れる。この特徴は他の慶尚道方言で広く見られるアクセント核型規則によるものである。それ以外は, 助詞は常に低く付く。

金湖島 (洞) も, 多鴨面と同様に三つの型が対立を成しているが, 多鴨面の「LHH…L」が金湖島では「LL…HL」で現れ, 具体音調で地域の違いが現れる。また, 長母音の現れ方も, 高平に現れる多鴨方言とは異なり, 第1音節がはっきりした上昇調で発音される (RHL…)。「HHL…」の2音節語は, 単独ではHMのように発音されたりもするが, 助詞が付くと「HH-L」で型の特徴が現れる。また, 文節が4音節以上になると, 多鴨面と同様に, 下降の遅れによる「HHML…」・「HMLL…」も多く現れる。また, 4音節語以上では, 「HHL…」が「LLH…L」と併用される場合が多い点も共通する。「HLL…」の1音節語に, -k'aci (~まで) が付くとアクセント核型規則による特徴が現れる点も, 多鴨面方言と共通する。

光陽邑方言は, まだ十分な調査には至っていないが, 二つの型が対立を成していると解釈した。上記の2方言の「HLL…」が対立を失っているものの, 「HHL…」と「LL…HL」は対立が保っていると観察した (長母音の例は, 上昇調のRHL…で現れる)。ただし, 4音節語以上ではほぼ弁別性を失っている可能性が高く, 1音節語や2音節語の単独や助詞付きにおいて辛うじてその弁別性が保っていると考えている。また, 文の中では音調型に関係なく, すべて「LL…H」のように現れる特徴 (仮に, 句のイントネーションと呼ぶ) があり, この点を含めて今後より詳しい調査が必要である。

はじめに

日本の国語学界では、上代語では母音連続は一般に忌避されていたと信じられている。母音連続は左母音脱落（左脱）あるいは右母音脱落（右脱）、あるいは両母音の第3母音への融合、で解消されるとされてきた。（連続する2母音より遠い母音まで考慮に入れる人もある。）左脱か右脱かは相対的に狭い方の母音が脱落するという。

以上の通説は正しいか？

資料

日本最古で最多の資料は奈良時代（8世紀）の成立と思われる上代の歌集『万葉集』、僅かな量のものではあるがそれとほぼ同時代の韻文・散文資料である。上代語の音韻は後代のものと違うが、それは母音脱落にほとんど関係無い故、当該音節末に甲乙の小字（ローマ字には1, 2の小字）を附し、甲類音節と乙類音節との別を示すだけにする。

簡略表記

以下厳密な表記はひとまず避けて出来るだけ簡略な表記を用いる。古代語の原文は「」に入れる。音韻転写は片仮名とローマ字を用いる（脱落する母音はローマ字に下線を附す）。甲類音節・乙類音節の別は示すが、出典・所在箇所は略す。

典型例

○L 左母音脱落（左脱）

アハ+ウミ_甲 → アフミ_甲 「阿布瀨」

apa+umi₁ apumi₁

淡 海

ト_乙コ_乙+イハ → ト_乙キ_甲ハ 「等伎波」

to₂ko₂+ipa to₂ki₁pa

常 磐

アラ+ウミ_甲 → アルミ_甲 「安流美」

ara + umi₁ arumi₁

荒 海

カハ+ウチ → カフチ

kapa+uti kaputi 「可敷知」
河 内

○ R 右母音脱落（右脱）

フナ+イデ → フナデ

puna+ide punade 「布奈豆」
船 出

カレ+イヒ_甲 → カレヒ_甲

kare + ipi₁ karepi₁ 「可例比」
乾 飯

ノ_乙+ウミ_甲 → ノ_乙ミ_甲

no₂ +umi₁ no₂mi₁ 「能瀬」
GEN 海

コ_甲+ウム → コ_甲ム

ko₁ +umu ko₁mu 「古武」
子 産

今までの研究

今までの研究では、既述のように、左脱・右脱の条件は母音の広狭による、狭い母音が脱落するとされてきた。しかしその仮説では例外が多すぎるというのも事実である。そこで母音連続の2母音の外側の母音の広狭までも考察に入れる案も提出され、文法的・意味的な考慮もされてきた。中古（11~12世紀）のアクセントは上代のアクセントとほぼ同じであるという仮定のもとに、母音脱落する場合の連続する2母音の中古アクセントは同じ声の高さ（高高あるいは低低）である（したがって上古語のそれも同じでそれが重要だ）という研究も報告されている。

多くの研究にも拘わらず、左脱右脱の条件は今ひとつすっきりしていない。

上代語の母音脱落は、韻文の音数律に合わせるためのものであり、資料の記録時に既に脱落形が固定しているものを除けば、後代（中古以降）の形では、非脱落形になっているものが多い。これを母音脱落以前の形への回帰とみる考え方が国語学の世界では一般的のように見えるが、筆者は、回帰ではなく、固定した脱落形以外の散文言語の形は以前のままの非脱落形であると見たい。

母音脱落の型に後代の状態を加えて示せば以下の(1)ようになる。

(1)	上代	後代	上代	後代
左脱	淡 海		乾 飯	
	アハ+ウミ _甲	アフミ	カレ+イヒ _甲	カレヒ
AL	apa+umi _i	apumi	AR	kare+ipi _i
脱落形が 後代の形	↓	↗	↓	↗
	apumi _i		karepi _i	
	荒 海		GEN 海	
	アラ+ウミ _甲	アルミ	ノ _乙 +ウミ _甲	
BL	ara+umi _i	arumi	BR	no ₂ +umi _i
非脱落形が 後代の形	↓	→	↓	→
	arumi _i		no ₂ mi _i	

(1)の4類それぞれについて

・AL (左脱で脱落形が後代の形)

この類は脱落形が上代後期(奈良時代)では既に音韻変化して固定しているものと考えられる。この類の複合形が意味的にも融合・固定している(例えば、アハウミ → アフミでは、奈良時代では既に《淡水湖》ではなく地名《近江》になっている)例が多いことにも矛盾しない。

・BL (左脱で非脱落形が後代の形)

この類は、音数律に合わせるために本来の非脱落形が韻文で音数律に合わせるために(いわば臨時に)母音脱落したものと考えられる。したがって、後代でも散文では非脱落形が生きている。

・AR (右脱で脱落形が後代の形)

この類に属するものは極度に例が少ない。筆者の気付いた所では、kapa+uti → kapati 《河内》, kare+ipi_i → karepi_i 《乾飯》, puna+i_{ide} → punade 《船出》程度である。nari+i_{ide} → naride 《成出》などは右脱か左脱か分からない。

kapa+uti 《河内》の右脱形 kapati は上代に例が見られず、中古に右脱形の「かはちのかみ」と左脱の「かうちのかみ」の両形が『源氏物語』大島本の同じ関屋の巻に見られる。

kare+ipi_i は右脱形 karepi が中古にいろいろ見られるほか、非脱落形 kareipi も散文にかなり見られる。

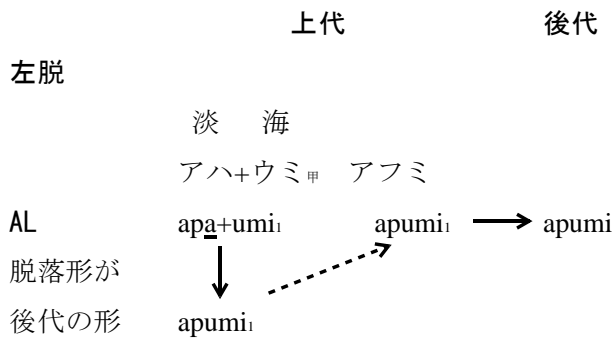
・BR (右脱で非脱落形が後代の形)

この類は、歌語化していると思われる「モフ」《思ふ》(are+o₂mo₂pu → aremo₂pu 《吾思ふ》)を除けば、no₂+umi₁ → no₂mi₁ 《の海》, ko₁+umu → ko₁mu 《子産む》, to₂+ipu → to₂pu 《と言ふ》等(《と言ふ》は左脱の to₂+ipu → tipu 「チフ」もある), みな左構成要素が1音節語で、1音節語の母音を脱落させたくないことで右脱になっているように思われる。

以上AL, BL, AR, BRの4種のうち特殊なARとBRを除き、ALもBLも左脱であることは、その理由に関する憶説はともかく、「語尾の母音が脱落するのが原則である」(橋本進吉「国語の音節構造の特質について」『国語音韻の研究』1950, 岩波書店)のとおりと言える。

(1)は発表当日に示したものであるが、脱落形が後代の形になるAL, ARは、当該の上代資料の記録時より前に音韻変化が起こり、それが上代において既に固定したのであるから、(1)の略式表記より(2)の表記の方が適当であると考え(ARについても同様)。

(2)



おわりに

構成要素の音韻列(apa+umi₁など)からAL, BL, AR, BRの4類への分属は予測できないが、結果としての4類それぞれの特徴は分明である。